

カタツムリの赤ちゃん誕生

岡崎市根石保育園（愛知県岡崎市）

[3～5歳児]

<4月20日>

クラスでカタツムリを飼育することになった。子どもたちの提案で、「カタコ」と「カタスケ」という名前を付け、餌やすみかも調べるなどして、意欲満々で飼育し毎日観察をしていた。

<5月12日～カタツムリの卵発見！～>

A児が「これ何？」と、保育者に言う。
保育者が「もしかして卵じゃない？」と言う。
「えーっ！」子どもたちも驚きびっくり。
「見たい見たい！」と、友達が集まって来る。

B児が「卵が白くて光ってるよ！」目の前の卵に、みんなで感動する。図鑑と比べている子どももいる。

B児「赤ちゃん生まれるよ！」と言うと、子どもたちでさらに期待を膨らませ、他のクラスにも知らせに行く。

<5月23日～卵発見から10日目～>

10日経ったが赤ちゃんが生まれた様子がない。
C児「まだ赤ちゃん出てこないね」D児「水が足りないんじゃない？」
E児は、「少し卵が茶色くなった！」と変化に気付く。
誰ひとり、「もうだめだ」「死んじゃった」等という子どもはいない。みんな諦めずに観察を続けた。

<6月2日～赤ちゃん誕生！～>

B児が「カタツムリの赤ちゃんだ！」と興奮した大きな声で友達に知らせた。みんながすぐに駆け寄り、C児「凄い赤ちゃんだ！」E児「やったねー！」などと、声を出し大喜び。
C児「カタコちゃんの殻の上にも乗ってるよ！」A児「蓋の所にも付いてる！」E児「こっちにもいるよ」何匹か一緒にかえったようで次々に探しみんなに知らせる。

B児が「上から逃げちゃうよ」と心配する。
第一発見者の B児は、ガーゼ掛けを「僕がやる」と、とても張り切っている。そして、ジーッと離れずに見たり、図鑑と見比べたりしている。

B児「本と一緒に赤ちゃんには殻が付いていた。小さかった」

<数日後～赤ちゃんは何を食べるの？～>

数日後A児は、赤ちゃんが餌の所にいないことに気付く。A児「大きいカタツムリが食べると（餌が）なくなっちゃうんだよ」とA児なりに考えた。

C児「柔らかいものが食べやすいんだって」E児「レタスがいいんじゃない？」相談の結果レタスをあげることになった。
子どもたちは、カタツムリの様子をよく観て成長を楽しみにしていた。

[考察]

- 産まれたての卵を発見することができ、カタツムリの卵の小ささや一度に沢山の卵を産むことなど、気付きが多くあり、子どもたちも保育者も、共に初めての感動体験を味わうことができた。さらに、卵から赤ちゃんが出てくることを知ったことで、期待感が高まり、興味が継続したと思われる。
- 図鑑や本を見て知識を得るだけでなく、実体験をしたことが、子どもたちの学びに繋がった。
- 子どもたちの様々な出会い、発見、気付きが、探究心、学びへと深まるには、環境作りと保育者の援助が大切であると考えられる。

保育者のかかわり援助

A児を「よーく見付けられたね。凄いね」と受け止め認める。

B児の気付きを「本当にツヤツヤしているね」と受け止める。

本に、10日くらいで赤ちゃんが出てくると書いてあった事を子どもたちに知らせる。



一人ひとりの子どもの言葉に耳を傾けて発見の喜びに共感した。初めて見るカタツムリの赤ちゃんの姿にただただ「凄い」「小さい」と感動した。(保育者も子どもたちと同じ思いであった)

「そうだね。蓋の穴から逃げちゃうね」とB児の気付きを受け止め、ガーゼを掛けることを提案する。

「何を見ていたの？」と、B児に尋ねその思いに共感する。

「赤ちゃん初めて見たよ。殻小さいね。かわいいね」B児の発見（赤ちゃんにも殻が付いている等）が、カタツムリのことを理解する学びに繋がっていると感じ共感した。

子どもたちと一緒に、カタツムリは何を食べるか図鑑や本で調べるなどの援助をし、子どもたちの気付きを受け止める。

(みどころ) 保育者が、子どもたちの気付きや発見を丁寧に受け止め、気持ちに寄り添い“小さな命との出会い”“生き物の不思議さとの出会い”など感動体験を共有しています。興味をもち続けるような環境作りや援助により活動が継続し、カタツムリのことを深く理解する学びにも繋がりました。このような過程から「科学する心」の育ちを読み取ることができます。